ソードアートオンライン　くのいち忍法伝

MITUKAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ソードアートオンライン　くのいち忍法伝

【Ｎコード】
Ｎ１４４９ＢＡ

【作者名】
ＭＩＴＵＫＡＮ

【あらすじ】
ソードアートオンライン、この世界にβテストから参加していたカスミは
デスゲームと化した今もくのいちとしてプレイしていた。
だが、彼女の知らぬところで、事態は大きく変容を遂げようとしていた。

ソードアートオンラインの２次作品です。原作キャラはでません。
設定は文庫版準拠に作者の脳内設定で補完しています。

一章ではほとんど戦闘はありません。

以前にも原作キャラを使って書いてみたのですが、
設定の祖語のため削除してしまいました。
今回は多少の祖語には目をつむっても書き上げるつもりですので、
どうかよろしくお願いいたします。

ギルドの解散

ギルド解散

「う～ん、ようやくここまできたか……」

隠しクエストを終え、ようやく一般フィールドに戻ってこれた私は大きく伸びをした。

「あんなけ準備したのに、丸々一晩かかるととか、無茶苦茶だわ～」

クエストを開始したのは、昼すぎだったのに、まさか、朝日を拝むことになるなんて……

「まぁ、これで念願の体術スキルも手に入れた訳だし、これからガンガンレベ上げして攻略組に追いつかなきゃ。」

う～ん、ちょっとソロが長すぎたのか、独り言が多くなっちゃたな……

気をつけないと変に思われるかも……

とりあえず、ここ最近クエストクリアのために連絡を絶っていたギルメンに報告と現状確認をしなくっちゃ。

「ダンジョンに篭る前は、確か２５層の迷宮区はほぼ攻略も済んでたんだよね……」

あっ、また口に出ちゃった。

反省しながらメニュー画面を呼び出す。

うわっ、ギルメンからのメールがメチャクチャ貯まってるよ……

「あらっ、ギルマスからもメールがきてる……珍しいわね～」

貯まったメールの中に重要を表す点滅を繰り返すメールがあった。

差出人は私が所属するギルド≪風魔忍軍≫のマスター『コタロー』からだった。

なにかあったのかな？と最新のメールを置いといて確認して……

「はぇ！？」

あっ、変な声が出ちゃった。

＊　＊　＊

私がこのゲーム、ソードアートオンライン（以下ＳＡＯ）に閉じ込められてから半年が過ぎていた。

私のキャラクター名は『カスミ』、

現実では高校２年生だが、このＳＡＯでは千人のβテストに当選した先行組のひとりとして高レベル組に名を連ねている。

私がβ時代から所属していたギルド≪風魔忍軍≫はこのＳＡＯ世界で忍者型プレイを目指す一群だった。

ＳＡＯには戦闘職という概念がなく、選んだ武器に対して、既存のＭＭＯにあてはまるタイプでプレイヤーが勝手に分別しているだけ。

だから専用装備なんてのも存在しないので、規定の装備を組み合わせてそれらしくする、いわゆる「なんちゃって」装備なんだけど……

β時代にはＡＧＩ（敏捷）を高め、フィルドを縦横無尽に駆け回ったもんだ。

まぁ、火力不足の所為でタゲりすぎたＭＯＢを他プレイヤーになすりつけたりしたもんだから結構評判悪いんだけど……

しかし、本サービス開始後まもなくなされたデスゲームの宣告が事態をおおきく変容させた。

私達のギルドは当初、三十人ほどいたんだけど、デスゲーム判明後、脱退者が半数に及んじゃった。

理由はいろいろあったけど、ぶっちゃけ「デスゲームでロープレなんてしている場合じゃない」の一言につきる。

そんななか私は、「ともかくレベルをあげなきゃ」とすぐにフィールドへと駆け出した。

私がこんなに強気に出れたのは、やはりβ時代の経験によるとこ

ろが大きい。

レベル制を採用しているＳＡＯでは、低レベルのＭＯＢ相手だと文字通り無双ができる。

まぁそれ自体はみなわかっているだろうが、やはり実際に経験しているのといないのとでは覚悟が変わる。

そして私がスタイルを変えなかったのは、選択していた武器≪短剣≫はＡＧＩ重視で手数を稼ぐことにより攻撃力を補えるから。（「逃げる」という手段を捨てがたかったってのもあるんだけど……）

その後、β時代によくいっしょに行動した男女ペアが追いついてきて、三人でレベル上げにいそしんだ。

ギルド≪風魔忍軍≫では、上階につづく各層の迷宮区でのボス戦以外は各自が自由行動をしてた。

β時代、私はもっぱらこのハヤブサとツバメというキャラ名の二人と行動していた。
（二人はＭＭＯのオフ会で知り合って、付き合ってるんだって。ちっ、リア充め）

正直、ギルメンでも名前だけ知っているって人のほうが多かったりするんだけどね。

そんな目的意識の低いギルドなんだけど、β時代に未達成だったクエストの成就だけは本サービスでは、とみんながいきこんでいた。

それはエクストラスキルのひとつ≪体術スキル≫獲得クエスト。

β終了間際の第７層で仕入れた情報により、そのクエストが第２層にあることだけは掴んでたんだけど、クエスト発動条件などは一切わからないまま本サービスを迎えちゃった。

開始一か月後に解放された第２層をしらみつぶしに探したけど、結局、第７層解放まで見つけられなかった。

だけど、第７層で必死の聞き込みによりついにクエストへの隠し通路の存在を確認。

即、数名がクエストに挑んだ。

私達三人からもハヤブサが挑戦した（私はスロットの空きがないので今はパス、ツバメは「ＭＯＢを殴るなんて無理！」と最初から取る気無し）。

そのハヤブサが戻ってきたのは三日後だった。なんでもＳＴＲの要求値がかなり高ったようで、

「カスミも挑戦するなら、武器を変えてでもＳＴＲを伸ばしたほうがいい。」とのこと。

（詳しい内容は「行ってからのお楽しみ、っていうかできれば同じように苦労してほしい」と苦笑された。ふんっ）

現在Ｌｖ２０の私は（第１０層までに出るＭＯＢはＬｖ１０までで、レベル差が１０離れると経験値が入らないのでＬｖは２０までしか上がらない。）Ｌｖ３０まで保留とし、Ｌｖ２５からダンジョンに行き、両手剣で集中的にレベル上げをしてから挑戦することにした。

そして２週間前にＬｖ２５に達した私は、二人と別れ、低層に移

動。
始めの一週間は両手剣のスキルに慣れることに費やし、その後一週間ダンジョンに篭り続けた。
そして昨日の朝、ようやくＬｖ３０に到達した私は、そのまま第２層に降り、街で昼食を取ってからクエストに挑戦した。
クエストの内容は「素手で大岩を砕く」といったとんでもない内容だった。
そしてその大岩は、
「この鍛え上げたＳＴＲを見よ！」とばかりに振り下ろした私のこぶしをあっさり跳ね返した。
そのあとクエ管理のＮＰＣのじぃさんに顔に落書きされ、クエスト終了までリタイアできないと告げられる。
そして日も暮れ、夜も過ぎる頃には半泣きで岩を叩き続ける私の姿があった。
やがて空が明けかかってきた時、ようやく歓喜の瞬間が訪れた。
すると「じぃさん、起きてたの？」と言いたくなるようなタイミングで現れたＮＰＣは（ＮＰＣなんだから当たり前っちゃ～当たり前）、あっさりとスキルを渡すと、
「精進せいよ」との一言を最後に小屋に戻って行った。
帰る前にその小屋でちょっと寝かせて～と頼みたかったのに……

仕方が無いので、フラフラする頭をこらえながら帰路についた。
（転移用の結晶石は使えなかった）

＊　＊　＊

ようやくフィルドに戻った私の目は今、開かれたメニュー画面で点滅する一文に釘付けとなっている。

『ギルド≪風魔忍軍≫は解散する。以後は各自おのおのの責任を持って活動すること。　コタロー』

ギルドの解散（後書き）

文庫版準拠とうたっていながら、さっそく破っています…ｏｒｚ

ギルド風魔忍軍と体術スキルに関しては、川原礫先生ご本人のＨＰ、ＷｏｒｄＧｅａｒ内の『続・星なき夜のアリア』から拝借いたしました。（２０１２／０１／０３現在　閲覧可能）

これ以降、Ｗｅｂや公式同人誌の設定と喰い違ってくるかもしれませんが、作者は未読なのでご了承ください。

ただ、感想などでお教えいただき、手直しで反映できるのであればさせていきたいです。

また、無理な場合もその旨ご報告させていただきますので、ご意見おまちしております。

再会

再会

「ちょっと、どうゆうことよ！！」

会ってそうそう、あいさつもそこそこにハヤブサとツバメを問いただした私。

あれからツバメにメールすると、「すぐ行くから第2層の主街区で待ってて」との返信。

あぁ～、待ってると寝ちゃいそう……

だが、そんな眠気も二人の姿を見ると、一気に吹っ飛んだ。

「まぁまぁ、ちょおと落ち着いてよ。これから説明するから。」

宥めてくるツバメの装備は、皮装備で部分保護したいわゆるシーフ型と呼ばれるもの。

「こっちもカスミに連絡とれなくてやきもきしてたんだぞ。」

と、軽金属の胸当てをした、剣闘士風のハヤブサ。

二人とも忍者らしさのかけらもなかった……

「ともかく、どこかＮＰＣの店に入ろう。いくらプレイヤーが少な

いといっても立ち話ですむ話じゃない……」

ハヤブサの提案に、眠気でごまかされていた私の空腹センサーが活動しだした。

そういえば、昨日の昼からなんにも食べてなかったわ……

＊　＊　＊

「つまりは、第２５層のボス攻略が原因なのよ。」

手近のＮＰＣレストランにはいるやいなや、サンドイッチにパスタとスープを頼んでから質問し出したんだけど、料理がくると食べるほうに夢中になっちゃった。

パスタをほうばりつつ左手でサンドイッチを探る私にあきれながら、ツバメが話をつづけた。

「あにぃぐわ、あっあの？」（なにがあったの？）

食べながらも先を促す私に、

「食べながらしゃべるな。とりあえず黙って聞いとけ。」

ハヤブサがたしなめてくる。くぅ～ツバメには尻にしかれてるくせに、えらそうだ……

「そもそもはギルマスを筆頭にギルドのメンバー数人が、ここ何層か軍に強力していたってことからなのよ。」

「ボス戦以外にも迷宮区の斥候やレベル稼ぎスポットの陣取りなどかなり深くかかわってたようなんだ。」

「まぁ、その辺までは上手くいってたみたいなんだけど……」

「25層のボスがとんでもなかったんだ」

「私達はほらっ、あんまりボス戦に参加しなかったじゃない。だから他と比べてっていわれてもピンとこないんだけど、サイズも攻撃力もけた違いだったんだって。」

「で、軍から大勢の死者が出るっていう最悪の結果になったんだが、その時に……」

「うちのギルドからも死者が出ちゃったんだよね。」

「それって、私も知ってる人……？」

「ううん、まず会ったことないと思う。私らも知らない名前だったし、βにはいなかった人だって。」

「あぁ、コジロー達から聞いたから間違いないだろう。」

「あっ、あの二人は無事だったんだ。」

彼らはβ時代からのギルメンで、語尾に「ござる」とつけるので

よく覚えてた。

「あの二人は≪聖竜連合≫に加担していて、２５層のボス戦にも参加していたんだって。」

「で、死人を出したんで、解散ってこと？」

「表向きはね。」

「なによ、その言い方？　裏事情があるの？」

「あぁ、ボス攻略で軍が大敗したのは、ボスにびびって逃げ出したのがいたんだ。
それがきっかけでパニックが起こり、戦線が大混乱に陥ったからなんだが……」

「その最初に逃げたのがうちのギルマスだって話。」

「そこで怒った軍幹部が姿をくらませたギルマスに賞金をかけたってもっぱらの噂だ。」

「まぁ、そのへんは噂の域をでないんだけど、うちらのギルドのせいだ！って声がおおきいのは事実。」

「だからギルメンだってすぐにわかる格好をしていると、パーティーに入れてもらえないどころの話じゃない。」

「プレイヤーショップじゃ買い物できないし、最悪ＰＫされるかも……」

それで二人はその格好なのか……

「だから他のプレイヤーの目につかないようにここで待ち合わせたんだ……」

「うん、そう。カスミちゃんも上に行く前にＮＰＣショップで適当に服かって着替えなきゃ。」

「上って、結局２５層でとまってるの？」

「いや、２５層はそのまま≪血盟騎士団≫や≪聖竜連合≫らの活躍でクリアされた。
四日前には軍抜きで２６層も攻略され、今は２７層だ。」

「軍抜きで？　いまのギルドの人達ってそんなにレベル高いの？」

「ええ。もう４０超えてる人もいるって。それに軍ていっても所帯が増えすぎてコル稼ぎの方がメインで、レベル的にはトップとちょっと差が開いてたんだって。」

「トップギルドの連中はもうフィールドじゃ経験値が入らないからって、ガンガン攻略をすすめている。
３０層到達まで二週間かからないんじゃとまで言われてるな。」

「ふえぇぇ、どんだけぇ～」

なんか二週間離れただけで、浦島太郎になった気分だわ……

＊　　＊　　＊

食事が済むと、眠気が強烈に戻ってきたので、話を切り上げ店を出た。
すぐにも宿をとって眠りたかったが、27層に連れて行ってもらわないと街の名を知らない私じゃ
一人では行けないので（今聞いても忘れそうだし…）、服を買って
（街着のワンピース。店で着替えた）
27層に移動。宿に直行し、そのままベッドへ。

うとうとしながらも頭をよぎるのは……

さて、これからどうしよう？

ボスの経験値でレベルアップしている攻略組には追いつけそうにもないし……

だからって、死んじゃうかもしれないボス戦なんて怖すぎて無理だよね～

あぁ、せっかく体術取ったのに使いどころないのかなぁ～

はぁ～あ、いいや、今は寝て、起きてから二人と相談しよっ。

再会（後書き）

カスミのユバメ達に対する口調がタメ口なのは、
ツバメが「ゲームで敬語禁止！」と言ってるからです。

話し合い

話し合い

夕方、ドアをノックする音で目覚めた。

食事に行くからと、二人が起こしに来てくれたんだ。

二人とも、今は街着に着替えてる。

ツバメはへそ出しTシャツにローライズのショートパンツ。

ハヤブサは青の開襟シャツに白のスラックス。

どちらもプレイヤーメイドの品とのことで、ちょっとしたおしゃれさんってかんじ。

生産職の人らも結構レベル上げてるんだな〜

私は2層で買ったやぼったいワンピース（水色）を見て、

なんか、「とほほ……」な気分だった。

＊　＊　＊

「で、二人はいまどういうふうに動いているの？」

ＮＰＣレストランにたどり着くまではここ２７層の説明を聞いてたんだけど、

店につき、注文も終えて、いま一番気がかりなことを訪ねた。

「それなんだが、俺達はいま生産職をあげているんだ。」

「うん、私が裁縫、ハヤブーは鍛冶。」

うわっ、そっちは考えてなかったわ……

あっ、ハヤブーっていうのは、「ハヤブサって呼びにくい！」のでツバメがつけたあざな。

当然ハヤブサは嫌がったんだけど、「ならハヤトって呼ぶよ？」

あれ？なんか急にまともじゃない？

が、「実名で呼ぶな！素に戻って恥ずかしい！！」と、どなるハヤブサ。

つまり隼人が本名でそこからつけられたのがハヤブサ（隼）ってことなんだって。閑話休題。

「レベルなら生産でも上がるからな。まぁ、素材狩りに行くこともあるけど、そん時も経験値に気を使わなくてもいいから低層区で安全に行けるし。」

「私達もそれぞれの生産ギルドに入ってて、狩り行く時もそこで大規模パーティー組んでいくんだ。
いわば素材ツアーみたいなかんじ。裁縫なら部屋でもスキルレベルあげれるから夜も退屈しないよ。」

生産かぁ……、どうにもイメージがわかないんだよねぇ、これが。

メジャーな生産職で考えてみても……

鍛冶師：そりゃ私もゲーマーだから有名どころは知ってるけど、ＳＡＯにはまさに星の数ほどの数と種類の武器が存在する。かなりの武器オタでなければ注文に応じきれないんじゃないかな。

裁縫師：これは技術じゃなく、イメージが大事らしく、どちらかといえばデザイナーらしい。
が、現実（リアル）でファッション雑誌なんて見たこともない私じゃ無理っぽい。

細工師：これもデザイナー系。アクセサリーなんだけどこっちも興味なかったし。

料理師：調理自体は自動で、腕をこらすのはスパイス素材の組み合わせだって。
外食といえばファミレスな女子高生にそんな味がわかるわけない。

とまぁ、こんなかんじでダメダメな私。

あっ、ＳＡＯには回復薬なんかをつくる錬金術は存在しない。

低レベルの回復薬でも需要が高すぎて、プレイヤーが安易にはし

ってしまうのを防ぐためだって。

あと店売りよりも高レベルの薬なんかが出回ると、バランスが崩れるからってのも理由じゃないかって言われてる。

「しっかし、ツバメはともかくハヤブサは鍛冶なんて大丈夫？武器の種類ってハンパないよ？」

と自分じゃ無理っぽい問題をどうクリアするのか気になって尋ねてみた。

「あぁ、それなら大丈夫。俺は刀専門を目指すから。」

「刀ってエクストラスキルじゃないかって言われてる日本刀？　もう出てるの？」

「だいぶ前からもう結構でてるぞ。あれは≪片手曲剣≫を使ってると出るらしい。
２５層解放以降はＮＰＣショップにも並び出したし。」

「でも、それなら先行している鍛冶師の誰かがもう作ってるんじゃぁ……」

「それがそうでもないんだ。すでにそこそこレベルをあげた鍛冶師のメニューに刀は出てこないんだ。」

「それって……」

「そう、鍛冶師でも刀鍛冶はエクストラスキルじゃないか？って言われている。

普通、鍛冶師が使う武器はメイスとかの打撃系だろ。
そこで斬撃系っていうか刀スキルを発現させたプレイヤーが鍛冶すればできるんじゃないかって。」

「えっ、じゃぁハヤブサは刀スキル発現しているの？」

「あぁ、俺はβん時から曲剣使ってたからな。」

「他にも鍛冶って結構分業されててな。最初に基本武器をマスターするんだけど、そのままスキルを伸ばすと高ランクの武器は打てるんだけど、変わり種の武器は打てないそうだ。そういった武器を打つには
その系統の武器を一度は使わないといけないらしい。そういった鍛冶師はスペシャリストにはなるけど、
逆に基本武器の高ランク品はできなくなる。他にも強化を専門に育てるっていうのもいるしで、いろいろつぶしがきくんだな、これが。」

へぇ～いろいろあるんだ、っていうか結構深く考えてたんだ……

「だからさぁ、カスミちゃんも危ないことやめて生産職始めない？
イメージっていっても基本メニューにあるのをアレンジするだけだし。細工師なんかレベルあげてできるのはボーナス付加だけって話だから、既存品でも売れるかも。」

あっ、それなら私でもできるかも。
でもせっかく体術とったし、いままで育てきたスキルもおしいなぁ……

「ちょっとすぐには決められないかなぁ。もう少し考えさせて。」

「まぁ、カスミにはなにもかも急な話だからな。ゆっくり考えればいい。俺達ならいつでも相談に乗るし。」

「うん、すぐには無理よね。でもカスミちゃん、絶対ソロでフィールドに出たらダメよ。軍の弱体化でオレンジになる奴が増えてるらしいの。」

「後、前のギルドのことも他言禁止だ。わざわざ敵視される必要はないからな。短剣使いがＡＧＩ伸ばしてるのは当然だから格好さえ普通にしていたら問題ない。」

あぁ、ほんとに心配してくれてるんだ……

二人の真摯な態度に感銘を受けたが、その一方でその真摯さこそがこの世界はデスゲームなんだという事実をあらためて認識させた。

話し合い（後書き）

生産職の内容は完全に脳内設定です。
特に鍛冶はちゃんとした設定がありそうで、怖いです。
もし、情報があれば、お教えください。

あらたな再会

あらたな再会

食事をすませ、街の案内は明日にってことで、宿に戻った。

いまは、ひとりで部屋のベッドに寝転がっている。

「あらためて、じゃない。ようやく認識したんだ……」

デスゲームという事実を。

ここにいる私は現実（リアル）の私じゃない。レベルを上げれば超人になれる。

そんな私が死ぬわけない。とたかをくくっていたんだ。

そんな私につきつけられた現実、それは私が知っているアインクラッドはたかだか６層。

それは１００層の内、たった６％でしかないということだ。しかもその６％は初心者用の低設定。

この先どんな罠が待ち受けているか予想もつかない。実際２５層では想定外のボスで多数の死者が出た。

同じことがサブ迷宮やフィールドで起こらないなんて保障はまったくない。

そう考えると、生産職でレベルをあげるというのはとてもまっとうなことだと思う。

ツバメの話を聞いていると、自分にもできそうだ。
さらに言えば、店を出して成功する必要もない。
レベルさえ上がれば、素材を売るだけでもここでの生活費を稼ぐには充分。
店を開くっていうのはモチベーションを保つための目標っていうのがほとんどじゃないかな？
もちろん拘りを持って生産職をしているプレイヤーも大勢いるだろう。
でも、そういう人達は始めから生産職を選んでたはず。
最近始めた、にわか生産職はそんなもんじゃないかなって思うんだ。

それを非難する気は毛頭ないし、私が心惹かれているのも確かだ。
ただ、それでいいじゃんと揺れる気持ちの中に、それはダメっていう気持ちも存在する。
なにがダメ？と聞かれても答えられないんだけど、なんかモヤモヤしているんだ。

「え～い、きりがない。散歩にでも行こっ！」

堂々巡りをする思考から抜け出すため、街に出ることにした。

＊　＊　＊

いま生産職はどんなものを作っているのかと、露店を見てみることにした。

最前戦の街は攻略組が持ち込むいい素材が手に入るので、生産職は街が解放されると、即移動する。

そして、いい素材で作られた高ランクの装備を求めてまた人が集まるので、最前戦の露店は結構遅くまで開いている。

武器の露店を見つけたので覗いてみる。

そういや短剣も換え時かな、
せっかくＳＴＲ上げたんだからちょっと重くても攻撃力が高いのがいいかな……

並んでいる武器はさすが最前線だけあって高レベルなものばかりだった。

ただ品揃えはオーソゾックスな武器のみで、スタッフ（両手棍）やスピア（短槍）といったマイナーな物は無かった。

「短剣もなしか……」

やはり攻略に挑むようなプレイヤーは奇をてらわないってことなのかな。

自分の武器が主流でないことに軽く落ち込んでいると、

「カスミさん」

プレイヤー名で呼びかけられた。

名前を知ってるってことは知り合い？誰だろう……

「はい？」

「え～と、おひさしぶり？いや、この姿でははじめましての方がいいっすか？」

「はじめましておひさしぶりであります。」

そこには見慣れぬ男性プレイヤー二人がいた。　二人ともＳＡＯではめずらしい黒のスーツ姿。

あれ？　こんな口調、聞き覚えがないんだけど……

「え～と、どちらさま？」うん、素直に聞こっ。

「ははっ、この姿じゃわからないっすね。ＳＮＡＫＥっす。」

「自分はＯＷＬであります。」

え～、スネークにオウルっ？あの渋顔やせマッチョの～？

口調もハードボイルド風だったのに……

目の前にいるのは自分と同じ年くらいの男の子。

スネークはぽっちゃりというよりまんまるっていうのがしっくりくるおデブちゃん。

オウルは逆にひょろっていうかガリガリ？

「β以来ですから半年ぶりっすか？カスミさんはアバターとほとんど変わらないようでうらやましいっす。」

「なんか顔もアバターに似ている気がするであります。」

そう、二人とはβ時代にハヤブサ、ツバメコンビの次によく遊んだギルメンだった。ん？二人？

「あれ、いつももう一人いっしょにいたよね。あの無口なＦＯＸさん。」

「あぁ、フォックスの姉御でしたら、いま露店めぐりをしてるっす。」

「です。姉御はどこに行って、いつ帰ってくるかわからないので別行動であります。」

あっ、なるほど…って姉御？

「えっ、ちょっと待って、姉御って女性ってこと？あのフォックスさんが？」

あの人のアバターってダンディなおじさまキャラだったよね。

「そうなんっすよ。自分らもかなりキャラメイクに凝ったんっすけど、姉御は上をいってました。」

「自分らもびっくりであります。」

私もびっくりだよ〜。そっか、口調とか人口音声でわかるから無口だったんだ……

「でも、ほんとひさしぶり。私はすぐ≪はじまりの街≫を離れたからなんだけど、三人の話はいままで聞かなかったんだよね〜」

「まぁ、βん時のフレンドリストは消えてたっすからね〜」

「自分らもカスミさんを探していたのでありますが、見つける前にあの宣告がきたのであります。」

「ふ〜ん、それでどうし…」

「こらっ！あんたらなに女の子ナンパしてんの！！　身の程を知りなさい！！」

後ろから女性の声がかぶさった。

「い、いや違うんっすよ姉(あね)さん、」

「そ、そうであります、こ、こちらはカスミさんであります。」

「え、カスミ？あら、ほんと。うわぁ〜あんたはあんまり変わってないね〜」

ってことは、こちらがフォックスさん？

このシルバーブロンドさらさらストレートの？

ちょっときついめの美人さんが？

私よりもふくよかな胸の谷間をみせつけているこの人が（イラッ）？

そんな私の混乱をよそに、

「いや～すっごいひさしぶりぃ。ねぇねぇ、時間ある？どっかでお茶しない？」

ひとり盛り上がるフォックスさん。

「え、ええ、いいですよ、喜んで。」

混乱しながらもイエスの返事をした。

「じゃぁ、いきましょう。あっ、それと私達にさんづけはやめてね。キャラ名にさんづけってきらいなんだ。」

聞きたいこともあるし……、でも聞けるかな？

あらたな再会（後書き）

ご意見、ご感想おまちしております

決意

決意

「はぁ～、やっぱりカスミも同世代みたいね。私らは高2だったけど、カスミは？」

「あっ、私も高2。」

フォックスが「やっぱり」という根拠はβ時のログイン時間のこと。

9月に始まったβテストでは平日の昼間はほとんど人がいなかった。

帰宅部だった私は早い時では3時すぎにはログインしていたんだけど、前後してログインしてくるのがこの3人組だった。（ハヤブサとツバメは大学生だったので、平日でも朝からインしたりしていた。）

あの時は自動切断がついてたんだよね……

βの時は長時間使用による弊害を考慮するってことで一日の稼働時間が8時間を超えると自動切断され、３０分間は再接続できないように設定されてたんだけど…

「でも、ほんとカスミはアバターと変わらないね。私もそうしとけばよかったな。」

カスミのキャラは割と自分似のモデルを選んでいたからね。（胸を少しアップしてたのはナイショ）

「それじゃぁ、あの時はたいへんだったんじゃない？」

あの時っていうのはアバターが光につつまれ現実（リアル）の似姿へと変貌した時のことだ。

「そりゃぁもう、たいへんなんてもんじゃないわよ。いきなり目の前のイケメンが縮むは薄ぺらっくなるわでもうパニックよ。」

「姉（あね）さんこそひどかったっすよ。」

「姉（あね）さんは今の顔に角刈りだったであります。」

そういえば髪型は変わらなかったわ…

「こらっ、嫌なことまで思いださすんじゃないよ。まぁ男性専用装備が女性専用装備に代わってくれてたのだけは助かったけどね。じゃなきゃ、下着姿までさらすことになったかも…」

ブルッと身を震わせるフォックス。

「まぁ、さすがにいたたまれなくてね～、ダッシュで宿に戻っちまったよ。」

「自分も同じっす。この姿で続けたら笑い物になるって考えたら……」

「自分はこの姿が強くなるって信じられなかったっであります。」

う～、なんて言ったらいいんだろう？　そんなことないよ、なんて簡単にいっちゃダメだよね……

「それでギルドもすぐ脱退して引き篭もってたんだけど、一週間もしたら開き直っちまったよ。」

「姉さんが言ってくれたんっす。『いまを逃したら二度とこのＳＡＯで遊べなくなるんだぞ！』って。」

「それで自分らはハッと気付いたんであります。」

「犯罪が行われたゲームは間違いなく封鎖されるってことさね。ならもったいないじゃない？
こんなすごいゲームが二度と遊べないんだから。」

「さらに後続のゲームすらでるかどうか危ないっすから。」

「自分はもう一度ナーブギアを使う勇気はないと思うであります。」

あぁ、やっと納得できた。

『もったいない』それが安全策を受け入れ難くしていた理由なんだ。

私はもっとこの世界を楽しみたいんだ。無茶かもしれないけど、ちょっとは冒険もしたいんだ。

自分ひとりで納得していると、

「姉さん、自分らは露店が閉まる前にポーション仕入れにいってくるっす。」

「姉さんはもう少しカスミさんとおしゃべりしてるであります。」

「おや？そうかい、なんか悪いねぇ。」

「いや、姉さん連れていくと寄り道して間に合わないっすから。」

「適材適所であります。」

「うるさい！とっととといっといで！！」

「じゃぁ、カスミさんこれで。ハヤブサさんやツバメさんにもよろしくっす。」

「失礼するであります。」

「あっ、待って。フレンド登録しとかなきゃ。」

慌ててメニュー画面を開く。

「おや、あの二人とも会ってるのかい？」

「あのＮＰＣレストランで姉さんが先に出て行った後、三人できたんっすよ。」

「あの二人はまさにお似合いであります。うらやましいであります。」

「ちっ、現実(リアル)でも美男美女なんてリア充めっ。」

いや、フォックスだってすごい美人だから…

＊　＊　＊

二人が立ち去った後、今度は私の話をした。

「へぇ～あのクエ受けたんだ。そんなに固かったのかい？その岩。」

「固いなんてもんじゃないわよ、まるで凶器、いや狂った器で狂器ってほうがしっくりくるね。」

「ハハハ、それで使い勝手はどう？」

「それがまだ試してないんだ。今朝クエから戻ったばかりだし。」

「なら、練習に行く時は声かけてよ。ぜひ見たいわ。悲願の体術スキルだもんね。」

「うん、そん時はぜひお願いするわ。」

その後もたわいない話をしながらも、私は気になることを聞き出すタイミングをはかっていた。

「とりあえず装備は整えないとだし、街服も欲しいな。これ間に合わせだから。」

よし、さりげなくネタフリできたぞ。

「それにしてもフォックスは凄い格好しているね。」

フォックスは黒のボンデージ風のコルセットなのかな？それが胸まであるような下着のような上着に
ゴスロリ風のミニスカートと凄く扇情的な格好をしていた。
プラチナブロンドの髪ともあいまって、くやしいけど（主に胸が）すっごく似合っている。

「あぁ、これ？半分は開き直りなんだけど、あの二人といっしょに露店覗いてたらすっごい勢いで薦められたのよ～」

うん？二人も関係するの？

「なんでもヤセとデブをひきいる美人は扇情的な格好をするのがデフォだっていうのよ。」

あぁ～確かになんかそんな絵を見たことあったな……なんのゲームだったけ？

「で、二人にもいまのスーツを薦めてきてね。あまりの勢いに押されてつい買っちゃたんだよ。」

うっし、ファーストミッション、クリア！といってもこれはジャブ。

これから繰り出す右ストレートが決まるか！？

「あともうひとつ聞きたい事があるんだけど……」

うぅ、声がちいさくなっていく…、頑張れ自分！

「なに？」

「βの時のことなんだけど…」

あっ、いまフォックスの肩がビクンとなった、くっ、いけるか！？

「あの～、アレ、確認した？」

よしっ、言い切った、よくやった自分。

ガバッと立ち上がり顔を真っ赤にするフォックス（ＳＡＯは感情表現がオーバーだからホントに真っ赤）

「バ、バ、あ、あん……」　言葉にならないフォックス。

「え、え～と、どう？」

上目づかいでさらに尋ねる。ここはひいちゃダメだ。あぁ、でもいま私の顔も絶対真っ赤だ。

「……見てない……」

観念したのか、椅子に座りなおすと、うつむきながら小声で答えてくれた。

「え～、どうしてぇ？」　いや、どうしてもなにもないんだろうけど…

「……βの時は下着が脱げなかったの。だから……」

律儀に答えてくれた。エエ子や。

「あるにはあったの？」　なんか遠慮がなくなってきたなぁ…

「うん、上からさわったらなんかついてた……」

うわっ、言ってって恥ずかしくなったのか、真っ赤を通り越して顔が赤く発光しているよ～

うぅ、調子に乗りすぎた～、この空気どうしよっ？

右ストレートにカウンターをくらっちゃったよ～

決意（後書き）

今回、β時のログインにふれていますが、ＳＡＯの時間は現実とリンクしているみたいなんですねぇ。
それだと、普段インした時って夜ばっかりってことになるんだけど…
ＡＬＯはゲーム時間の一日を１６時間にしていると明記されてるんですが…

一応脳内設定として「ＳＡＯ時間は現実の６時間遅れ」ってのを考えたんですけど
こじつけっぽいので書くのをやめました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1449ba/

ソードアートオンライン　くのいち忍法伝

2012年1月4日01時48分発行